九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[010] 九州大学附属図書館研究開発室年報 : 2005/2006

https://doi.org/10.15017/3226

出版情報：九州大学附属図書館研究開発室年報. 2005/2006, pp.1-77, 2006-06-01. 九州大学附属図書館研究開発室
バージョン：
権利関係：

平成17年度における研究開発

1　図書館の将来計画に関する調査研究

室　　員　**平井　康之**（芸術工学研究院助教授）
担当部署　**昌子　喜信**（図書館企画課企画係長）
職　　員　**堀　　優子**（図書館企画課企画係）
職　　員　**牧瀬ゆかり**（コンテンツ整備課図書情報係）
職　　員　**立園恵巳子**（医学分館閲覧係）

〈研究開発概要〉

平成17年10月の理系図書館のオープンに向けて、空間構成・フロア構成のコンセプトをまとめ、導入する設備についての検討を行った。

〈研究開発の内容〉

理系図書館のエントランスプラザの設備についての検討を行った。ユーザーサイエンス機構の新キャンパス実験・感性空間プロジェクトが開催するビッグオレンジ・ワークショップにおいて、複数の家具メーカーからプレゼンテーションをしてもらい、その中から家具選定の参考とした。

2　海外の大学図書館に関する調査研究

室　　員　**松原　孝俊**（韓国研究センター教授）
担当部署　**井ノ上俊哉**（コンテンツ整備課図書情報係長）
職　　員　**堀　　優子**（図書館企画課企画係）
職　　員　**大村　明美**（図書館企画課企画係）
職　　員　**堤　　絢子**（医学分館相互利用係）

〈研究開発概要〉

平成17年度は、特に業務レベルでの図書館間交流を推進するため、ソウル大学校中央図書館から客員図書館員を受け入れたほか、日韓国際シンポジウムを開催し、日韓文化交流・学術交流を支えるための地域的な図書館協力について検討を行った。

〈研究開発の内容〉

1．ソウル大学校中央図書館から客員図書館員を受入

ソウル大学校中央図書館との間に取り交わした業務交流に関する覚書の趣旨に基づき、平成17年2月28日から8月26日までの6ヶ月間、ソウル大学校中央図書館の李成烈氏を客員図書館員として迎えた。李氏は、日本における資料の保存と管理や図書館間協力をテーマに研修を行い、九州地区内および東京地区の大学図書館等を訪問して、資料保存の取り組み状況の実地調査をおこなったほか、附属図書館で行われた『韓流・漢流図書館事情－海外図書館視察報告』で韓国図書館事情について講演するなど、業務レベルでの日韓図書館交流の実践にあたった。

２．日韓国際シンポジウムを開催

九州大学と釜山大学校の協力により、「日韓友情年2005」認定記念事業、国際シンポジウム『本が繋ぐ近い都市（まち）：日韓図書館交流2005』を開催した。

日韓文化交流・学術交流を支えるための地域的な図書館協力を検討するために開かれたこのシンポジウムでは、日韓の図書館関係者が、日韓の図書館の現況、日本語資料・韓国語資料の収集状況、協力事業の事例や新しい図書館協力の動向などについて報告した。

このシンポジウムの内容は、『国際シンポジウム「本が繋ぐ近い都市（まち）：日韓図書館交流2005」報告書』（九州大学附属図書館　2005.12）にまとめられている。

このほか、シンガポール・マレーシアの図書館視察を行い、

３　図書館職員の専門性育成に関する調査研究

室　　員　**竹村　則行**（人文科学研究院教授）
室　　員　**西村　重雄**（法学研究院教授）
担当部署　**原田　紀子**（文系合同図書室長）
担当部署　**田中由紀子**（コンテンツ整備課電子化係長）
職　　員　**山口　良子**（コンテンツ整備課図書情報係）
職　　員　**山根　泰志**（コンテンツ整備課電子化係）
職　　員　**轟　　朋子**（コンテンツ整備課雑誌情報係）

〈研究開発概要〉

図書館職員の専門性について明らかにし、その育成方法について調査研究するとともに、本学におけるサブジェクト・ライブラリアン制度のあるべき姿について調査研究を行う。

〈研究開発の内容〉

１．漢籍講習会の実施

平成15年度より開始した漢籍講習会は、中国や日本の伝統文化の根幹をなす漢籍について、その成立と伝播、分類法、文化に果たした役割等について具体的総合的に学び、文系地区の元岡キャンパス移転までの間に特に九大所蔵の漢籍について理解を深め、漢籍に明るい図書館職員を養成することを目標とした。２年を１サイクルとして実施し、第２巡となる平成17年度からは、より具体的で実際的な講習内容に努め、下記のとおり５回実施した。

［第１回］　平成17年５月25日（水）　15：00～17：00
漢籍目録入門　（講師：中里見敬　言語文化研究院助教授）
［第２回］　平成17年７月14日（木）　15：00～17：00
中国漢代の漢籍（一）（講師：南澤良彦　人文科学研究院助教授）
［第３回］　平成17年９月29日（木）　15：00～17：00
中国漢代の漢籍（二）（講師：南澤良彦　人文科学研究院助教授）
［第４回］　平成17年11月25日（金）　15：00～17：00
中国唐宋代の漢籍（一）（講師：静永健　人文科学研究院助教授）
［第5回］　平成18年1月27日（金）　15：00～17：00
中国唐宋代の漢籍（二）（講師：静永健　人文科学研究院助教授）

２．ラテン語古刊本書誌作成研修会の実施

今年度は４回の研修会を下記の通り実施した。発表者を決めてその所属する部局の資料を取り上げて報告するという従来からのゼミ形式は継続したが、発表者を複数にして役割分担をする試みもおこなった。ラテン語については文法が難しいため、事前にタイトルページを訳す作業を発表者を中心とした複数の人間で行い、各人の知識向上および作業の効率化を図った。

研修会では①タイトルページの日本語訳②資料の時代背景調査③書誌作成について発表者が報告し、指導者の西村重雄法学研究院教授に補足説明を受けることにより、事前学習だけではわからなかった部分を補い、参加者全員が共通認識を持つことができるようにした。

［第１回］　平成17年７月26日（火）16：00～17：30

医学分館所蔵「De balneis omnia quæ extant apud Græcos, Latinos, et Arabas」（1553年）の書誌作成について

［第２回］　平成17年10月28日（金）16：00～17：30

中央図書館所蔵「Q. Curtii Rufi Historiarum libri, accuratissime editi」（1677年）の書誌作成について

［第３回］　平成17年12月９日（金）16：00～17：30

医学分館所蔵「Opera Ambrosii Parei regis primarii et Parisiensis chirurgi」（1582年）の書誌作成について

［第４回］　平成18年３月13日（月）16：00～17：30

中央図書館所蔵「Titi Livii Patavini historiarum libri qui extant. Vol.1」（1679年）の書誌作成について

４　電子図書館システムの研究開発

室　　員　**荒木啓二郎**（附属図書館副館長、システム情報科学研究院教授）
室　　員　**池田　大輔**（研究開発室助教授）
室　　員　**南　　俊朗**（研究開発室特別研究員、九州情報大学教授）
担当部署　**瓜生　照久**（情報基盤センター電子図書館係長）

〈研究開発概要〉

平成17年度は、継続で科研費（基盤研究(B)　課題番号16300078　「RFIDシステムの大規模図書館への適用に関する実証的研究」）による助成を受けたRFIDに関する研究と、九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト（P&P）Dタイプ「ユビキタス社会における電子図書館のソフト面高度化に関する研究」の助成による電子図書館関連の研究を行った。

〈研究開発の内容〉

これらのプロジェクトでは、従来の電子図書館や図書館ではあまり注意が払われてこなかった２つの部分に着目して研究を進めることにした。一つは利用者による付加価値の蓄積であり、もう一つは物理的な資料へのアクセス向上である。後者は、主にRFIDを用いた研究になり、藤崎先生の報告（5 RFIDタグによる図書館運用に関する調査研究）に含まれるため、省略する。

図書館は資料を体系的に収集し、整理・分類という観点で付加価値を加えた上で利用者に提供する。しかし、分類の仕方は基本的に画一的で誰にとっても同じものである。個々の属性、例えば、所属や読書歴などに応じた分類を提供することも考えられる。つまり、自らが付加価値をつけ、それを図書

館の再利用に役立てるわけである。さらに、別の付加価値を利用することも考えられる。大学図書館の利用者の多くは、それぞれの分野で活躍する一線の研究者でもあり、彼らの付加価値は非常に価値があるだろう。このような観点から、利用者が本に対して読書録のような感覚でコメントを付したり、利用者の利用履歴やWeb上から抽出した書評情報などから図書の推薦をするシステムについて研究を行った。

付加価値データとしては、Web上の書誌データからの自動抽出とあわせて、自動認識技術を用いた館内利用動向の把握と貸出履歴データを用いる予定であった。しかし、法学研究院安東らと慎重に協議した結果、このようなデータを用いることはプライバシー保護の観点から問題があると判断した。これにより図書推薦システムにすぐに使えるデータがなくなったため、推薦システムとしてはオンラインのプレイリストを用いた楽曲やアーティストについて研究を行なった。この研究により、人気・不人気があるようなデータ（このようなデータにはZipfの法則と呼ばれる普遍的な法則が成立することが多い）からの知識発見には、従来のデータマイニングでは不十分なことを示唆するデータを示すことができた。

平成17年度は利用者の利用履歴を直接用いることはしなかったが、これらのデータを保護しつつ利用者の利便性を向上させるための研究を行なった。そこで、単にプライバシー情報を保護するだけでなく、図書館において個人情報と行動履歴（貸出履歴など）を分離する手法を提案した。このための基礎技術としてシステムLSI研究センターが提案するID認証基盤であるMIID （Media Independent ID; メディアに依存しないID体系）システムを利用し、平成17年度は理系図書館において貸出と入館時にICカードと携帯電話を利用可能にした。また、MIIDの導入より、従来の図書館サービスでは不必要に個人情報を取得していた状況が明らかになった。

昨年度プロトタイプを実装した仮想書架はインターフェイスとして重要である。今年度はプロトタイプを拡張してOPACと連携させた上で実証実験を行った。さらに、仮想書架の特徴である実際の背表紙画像を用いる点は、仮想書架を構築する上で時間やコストの面におけるボトルネックとなることが問題点として認識された。これを改良するため、半自動で背表紙画像を撮影するシステムのプロトタイプを構築し、効率性を実証した。

また、NTT、NTT西日本、NTTデータとユビキタス図書館研究会を立ちあげ、ユビキタス時代における大学図書館の在り方についての検討を行った。この研究会の成果はビジョンブック『ユビキタス時代の大学図書館サービス』としてまとめられた。この成果は、上記の電子図書館の研究成果を含み、新たな電子図書館のモデルとして重要である。

5　RFIDタグによる図書館運用に関する調査研究

室　　員　**藤崎　清孝**（システム情報科学研究院助教授）
担当部署　**河上　章彦**（利用支援課サービス企画係長）
職　　員　**宮岡　大輔**（利用支援課資料サービス係）
職　　員　**小柳　貴俊**（医学分館受入目録係）

〈研究開発概要〉

九州大学附属図書館における図書貸出／返却窓口の作業の効率化、図書検索時間の短縮、無人ゲートによる入退館管理など、図書館サービスの拡大を目指し、RFIDタグを用いた図書館運用に関する調査・研究を行う。

〈研究開発の内容〉

RFIDタグは、非接触の状態でタグ内の情報を読み出したり、タグに情報を記憶できる技術であり、図書館業務の電子化、自動化を進めていく上で鍵となる。すなわちRFIDタグを蔵書に貼り付けることにより、非接触で蔵書の情報を読み書きでき、タトルテープによる盗難防止機能とバーコードによる蔵書情報の管理の２つの機能を１つのタグで実現することも可能となる。この結果、（１）図書貸出／返却窓口の作業の効率化、（２）図書検索時間の短縮、（３）無人ゲートによる入退館管理、（４）蔵書管理の効率化やこの技術を活かした新たなサービスの提供などが期待できる。

今年度も、昨年度に引き続き、筑紫分館新館に移設したRFIDシステムの運用時の安定化を図るための調整を進めた。更に、自動書庫の図書入出庫時の手続きの中にRFIDシステムを組み込んだ。これにより、入出庫時の図書の登録処理の効率化を実現できた。また、図書館での利用を想定して書棚にリーダを組み込んだものを試作し、その有効性を評価した。コストの問題は別途考える必要があるが、これにより書架に配架されている図書をリアルタイムに管理できると共に、図書館内での図書の利用状況を調査できる可能性を得た。

RFIDシステムが広く認知されるにつれ、この技術を導入する図書館が増えている。今後は、相互貸借の効率化や他館の図書を間違って認識することを防ぐ誤認識防止の検討も必要であり、そのためには図書館で導入するRFIDタグの仕様統一が重要な課題となってくる。そこで、日本図書館協会主催のRFIDタグ用図書館共通認識コード案に関する説明会に参加し、状況の調査を行った。また、TRC 標準のRFIDシステムを導入しているちくほ図書館や2.45GHz帯のシステムを導入している宇都宮市立図書館を訪問し、運用状況の調査や意見交換を行った。更に自動認識展への参加や関連企業の訪問により、UHF帯RFIDシステムや13.56MHz帯RFIDシステムの最近の開発動向を調査した。13.56MHz帯のリーダを書架や棚に組み込んで、物をリアルタイムに管理するシステムの開発を目指した企業が目立って多かった。更に、人の位置を把握するためにRFIDの技術を適応した製品についても調査した。この技術は、今後図書館内の物や人の動きの調査などに応用出来る可能性もある。

今後もRFIDシステムを用いたサービスの向上に関する調査・検討を進めると共に、図書館に適したシステムの開発につなげるべく、基本的な特性の評価並びに高性能化に関する研究を行っていく。

６　レファレンス事例検索システムに関する調査研究

室　　員　竹田　正幸（システム情報科学研究院教授）
担当部署　尾上　五男（利用支援課調査サービス係長）
職　　員　片岡　　真（利用支援課調査サービス係）
職　　員　星子　奈美（コンテンツ整備課電子情報係）
職　　員　塚本　佳奈（医学分館相互利用係）

〈研究開発概要〉

本研究課題は、九州大学附属図書館におけるレファレンス業務支援のために、過去の事例を蓄積し、今後のサービス提供に役立てるためのレファレンス事例検索システムの構築に関する情報収集と調査研究を目的とする。電子図書館におけるレファレンス業務支援の基本は、日常的なレファレンス業務を通じて業務情報を再利用可能な形で収集・蓄積・再構成し、それを日常業務における利用者支援のために活用することである。業務情報の蓄積・再利用によって、利用者支援、新人教育、利用者の潜在的要求の発見などを効率よく行える。蓄積された業務情報は、（１）多様で（２）非定型な（３）大量のテキスト情報である、という特徴を持っている。一方、現在の情報検索／採掘技術は、表形式の関係データを対象としたものが主流であって、上述の業務情報にそのまま適用することはできない。今後、業務情報の蓄積が進めば、この問題は一層顕在化するであろう。そこで、本年度は、前年度に引き続き、多様・非定型・大量のテキスト情報から効率よく情報を抽出するための基礎研究およびソフトウェア開発を行った。

〈研究開発の内容〉

１．半構造データ検索エンジンの開発

図書館の電子化と情報共有の標準化に伴い、XMLやRDFなど半構造データとしての情報の蓄積が盛んになると予測される。これらの半構造データに対する既存の情報検索技術は、（1）XML-enabled database、（２）Native XML databaseの二つに大別される。前者は既存の関係データベース技術に皮を被せたもので、XMLデータを関係データの形式に変換するため、XMLの柔軟性を損なう。一方、（２）は、XMLデータをそのまま扱うが、現存の技術はデータが大量になると必要な記憶領域量が膨大になり、事実上使用できない。そこで、大量の記憶領域を必要とせず、かつ、柔軟な処理を高速に行うことのできる検索エンジンを開発した。XMarkのベンチマークテストにより性能テストを行った結果、商用XMLデータベースエンジンであるTaminoを大きく上回ることが判明した。

２．テキストデータからのパターン発見基盤技術の開発

多様な仮説空間に対し、大量のテキストデータからその特徴となるパターンを発見するための基盤技術を研究開発した。また、字種の多い日本語テキストへの適用を視野に、大きなアルファベットに対しても実時間で動作するアルゴリズムを開発した。

7　図書館における著作権問題に関する調査研究

室　　員　**黒澤　節男**（研究開発室特別研究員）
担当部署　**高田　宏昭**（利用支援課文献流通サービス係長）
職　　員　**兵藤　健志**（利用支援課文献流通サービス係）
職　　員　**山田由美子**（医学分館受入目録係）
職　　員　**城戸　弦太**（芸術工学分館目録情報係）
職　　員　**平良　　香**（六本松分館レファレンス係）
職　　員　**松石　健祐**（六本松分館図書情報係）
職　　員　**詫間沙由香**（文系合同図書室資料サービス係）

〈研究開発の概要〉

図書館における著作権問題を多角的に調査研究するとともに、今後、電子図書館システムの構築や図書館資料の電子化・発信を行う場合の個別事例に係る著作権問題について調査研究を行う。

〈研究開発の内容〉

大学図書館で所蔵する資料の複写についての取り扱いは著作権法第31条に規定されているが、その法文だけでは一義的に判断できないことが多い。様々なかたちで公表された著作物を扱う現場では、利用者の求めに応じて行う複写行為が適法なのか違法なのか迷うことが多い。また、著作権法を遵守することが、より手軽に広範囲な複写を希望する利用者とのトラブルの原因になることもある。

このような場合、図書館員としてどのように対処するべきか、著作権法を十分に理解し、今後より多様化するであろう図書館サービスについて、各自が適切な対応ができるようになるために、以下のように著作権勉強会を開催した。

［第１回著作権勉強会］
日　時：平成17年６月27日（月）15：00～16：40
内　容
１．「大学図書館と著作権」の現状について、黒澤研究開発室員の講話があった。
２．各自が日頃、疑問に思っていることについて意見の交換を行い、黒澤研究開発室員より関連する著作権法の解釈等についてアドバイスを受けた。

［第２回著作権勉強会］
日　時：平成17年９月15日（木）15：00～17：00
内　容
平成18年度にサービス開始を予定している、e-DDSサービスを提供する上で問題となりうる可能性があるものについて参加者間で意見の交換を行い、黒澤研究開発室員より関連する著作権法の解釈等についてアドバイスを受けた。

8　貴重資料の画像及び書誌データベース作成に関する調査研究

室　　員　**今西裕一郎**（人文科学研究院教授）
担当部署　**井上　久宏**（利用支援課図書館専門員）
職　　員　**別府　妙子**（コンテンツ整備課雑誌情報係）
職　　員　**小野真由美**（コンテンツ整備課電子化係）
職　　員　**羽賀真記子**（文系合同図書室資料管理係）

本居宣長　『古今集遠鏡』画像データベースの作成

本館所蔵の貴重資料の画像データベース作成は、これまで数年にわたって「古活字版源氏物語」、「無刊記整版源氏物語」、「古活字版枕草子・付慶安版本」、「枕草子新釈」、「蜻蛉日記解環・付版本蜻蛉日記」などについて行ってきたが、引き続き本年度、国学者本居宣長の「古今和歌集」の俗語訳である『古今集遠鏡』を取り上げ、本館所蔵の版本に加え、新出の稿本（写本）の画像データベースをを作成した。

本居宣長の『古今集遠鏡』は、寛政九年刊行の版本で流布し、近代になっても「歌謡俳書選集」版（昭和二年刊）や吉川弘文館、筑摩書房による二度の『宣長全集』においても、版本の翻字が提供されてきた。

周知のように、版本には宣長の俗語訳と解釈のほかに、ところどころ、『遠鏡』の出版を宣長に慫慂し出版に尽力した横井千秋による、「千秋云」で始まる千秋の説が細字で記入されている。

一方、本居宣長記念館には「清書本」といわれる写本が存在し、他にもそれに類する写本が二、三見いだされる。筑摩書房版全集では、「内容は刊本とほぼ同じ」と述べるにとどまり、それ以上の紹介はなされなかった（第三巻『遠鏡』解説）が、実は記念館蔵写本には刊本が備える「千秋云」がすべて無く、また『遠鏡』本体の俗語訳、解釈の部分においても、少なくとも言い回しの次元ではかなりの相違が見いだされる。

反町茂雄『弘文荘名家真跡図録』（昭和四十七年六月）において「本居宣長自筆草稿、鈴屋の印あり」として紹介された『古今集遠鏡』巻五の零本は、『図録』掲出部分に関するかぎり、記念館蔵「清書本」と一面の字配りのみならず、仮名の字母まで完全に一致する。反町氏の「自筆草稿」を認めれば、記念館本はその忠実な写しということになろうか。

また、『国書総目録』の『古今和歌集遠鏡』項の最初に「国会（自筆）」として掲出される国会図書館蔵写本も、字配り、字母は異なるものの、「千秋云」をすべて欠き、俗語訳、解釈の部分も記念館「清書本」と完全に一致する。

○

宣長記念館に自筆稿本として所蔵される写本『遠鏡』については、岩田隆氏が、新出の横井千秋宛宣長書簡に拠って、自筆稿本ではない可能性を指摘した。

○宣長が千秋に対して自筆稿本の写しの提供を求めていたこと

○宣長記念館所蔵の稿本『遠鏡』は宣長筆と酷似するものの自筆とは認めがたいこと

などの点から、宣長記念館蔵写本は宣長自筆稿本ではなく、宣長の求めに応じて横井千秋から届けられた写し、宣長書簡中の用語でいえは「叩本」ではないかと推定する（『宣長学論攷―本居宣長とその周辺―』）。

とすると、巻五のみしか残されなかった『弘文荘名家真跡図録』所載本が、宣長自筆稿本であり、本居記念館本はその写しということになるのであろうか。

ところで、近時、宣長記念館蔵本と酷似する写本が出現した。六巻六冊、各葉の字配り、行数、使用字母にいたるまで寸分違わない一本である。しかし、時に「レ→ト」、「ユ→エ」、「カ→コ」、「ヌ→ス」、「ナ→ト」、「ク→ウ」、「ツ→フ」、「ツ→ワ」など字形の似たカタカナの誤記が見られ、宣長自筆などではもとよりあり得ず、おそらくは宣長自筆本もしくは「叩本」たる宣長記念館本の、きわめて丁寧で忠実な写しであると考えられる。

ただし、この新出写本でいささか気になるのは、蓋に「本居宣長翁自筆　古今集遠鏡」と墨書された古色を帯びた桐箱入り、という点である。しかし中身は前述のように自筆本とは認めがたいゆえ、伝来の過程で中身がすり替わるような事情があったのかもしれない。

○

写本『遠鏡』の内容について「刊本とほぼ同じ」であるという筑摩書房版『全集』第三巻の指摘が正確でないことは、すでに岩田隆氏が前掲書において一、二例を挙げて言及しているが、稿本・版本間の膨大な数にのぼる異同は、宣長の推敲の痕を示す資料としてはなはだ興味深い。

その一端を紹介する。

285番　恋しくは見てもしのばむもみぢ葉をふきな散しそ山おろしの風

稿本では、まず、

紅葉ハモウ散テシマフタガ今カラモ　恋シイ時ニハ此紅葉ヲ見テナリトモ思ヒダサウニ　ヨソヘフキチラシテヤルナヨ　山オロシノ風ヨ

という訳を付け、それに続けて割注の形で、

譯ノ思ヒダスハ忘レテアリシコトヲフト思ヒ出スニハアラズ其物ノアリシ時ノ事ヲイロ／＼ト思ヒツヾクルヲ云ナリ

と説明を付し、さらにその後に、

餘材打聞ともに恋しくはといへるにかなはず。

と、国学の先行注釈書である契沖『古今餘材抄』および賀茂真淵『古今集和歌集打聴』の解釈の適否に言及する。

それに対して板本では、稿本の訳を推敲した、

紅葉ハモウ散テシマウタガ　今カラモ　**散タ紅葉ノ**恋シイ時ニハ　此紅葉ヲ**ナリトモ見テ愛セウニ　ソノヤウニ**ヨソヘフキチラシテヤル**ナイ　コレ**山オロシノ風ヨ

（太字は推敲箇所）

という訳を付けるのみ。訳としては稿本の「フキチラシテヤル**ナヨ**」が「フキチラシテヤル**ナイ**」に、「山オロシノ風ヨ」が「**コレ**山オロシノ風ヨ」に推敲されて、一段と俗語訳の色彩を強めることになるが、違いはそれだけではない。

稿本にあった「譯ノ思ヒダスハ忘レテアリシコトヲフト思ヒ出スニハアラズ其物ノアリシ時ノ事ヲイロ／＼ト思ヒツヾクルヲ云ナリ」という割注は、訳を「思ヒダサウニ」から「愛セウニ」に替えたことによって不用になったのであろう、板本では削除される。

ただし、この「思ヒダス」から「愛スル」への変更は、結果的には、次に掲げる契沖『餘材抄』説の採用にほかならない。

こひしくはとは紅葉の事也。見てもしのはむとはかたみを見て人をしのふといふやうに、後にしのふにあらす。見る**へ愛する**やうの心なり。万葉集にかやうによめる事おほし。

稿本では末尾に「餘材打聞ともに恋しくはといへるにかなはず」という、契沖、真淵への批判が記されていた。その意味するところは判然としないが、板本ではそれも削除される。その削除は、契沖

の「愛スル」説を採用したことと関係があるのかもしれない。

このように、285番歌では、稿本から板本への過程で宣長説は圧縮されることになったが、その一方で、宣長訳の後に『古今集遠鏡』の出版に預かった門人横井千秋のコメントが付されている。

千秋云　此もみぢ葉は、ちりしきたる落葉をいへる也、見てもといふにて然聞えたり、せめては落葉を見ても也、ももじあはれ也

285番歌とは逆に、板本で増補される場合もある。

749番　よそにのみきかまし物を音羽川わたるとなしにみなれそめけむ

板本の訳は、

タヾヨソバカリ聞テ居ヤウデアツタモノヲ　アウデモナシニ　ナニシニ此ヤウニナレソメタコトヤラ　**ナマジケニナレナジンテ　ソシテ逢ハレヌノハサテ／＼ツライモノヂヤ**

であるが、稿本では「ナマジケニ」以下を欠く。板本の段階での書き足しである。

その他、

200番　君しのぶ草にやつるゝふるさとはまつ虫の音ぞかなしかりける

の場合、

（稿本）人ヲ待ツト云名ユエカ一入カナシウ**聞ユル**ワイ

（板本）人ヲ待ツト云名ユエカ一入カナシウ**聞エル**ワイ

と、ほぼ同じ訳であるが、稿本の「聞ユル」が板本では「聞エル」と動詞の活用が一段化して、より俗言に近い言い回しに替えられている。

367番 かぎりなき雲ゐのよそにわかるとも人を心におくらさむやは

では、

（稿本）限リモナイ遠イ雲ヨリアチラノ国へ**オレ**ハイクヂヤガ

（板本）限リモナイ遠イ雲ヨリアチラノ国へ**ワシ**ハイクヂヤガ

一人称「オレ」が「ワシ」になっている。「おれ」と「わし」については、時代、男女、階層などの違いに応じて多様にして微妙な分布を示すことが報告されているが（『講座日本語の語彙・語誌Ⅰ』所収「おれ　わたし　わし　わっち」彦坂佳宣）、宣長におけるこの推敲は、「おれ・わし」問題にひとつの材料を提供することになろう。

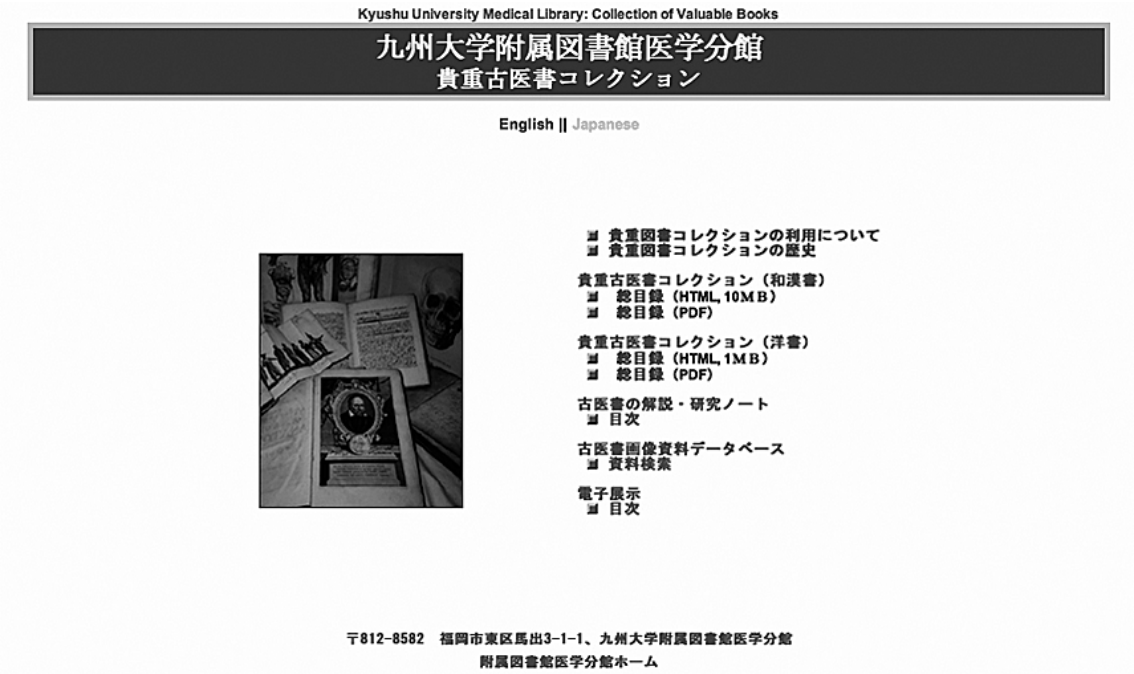
○

本データベースでは、『古今集遠鏡』の稿本と板本それぞれの画像データベースを作成するとともに、上述のような稿本から板本への興味深い推敲過程を明示すべく、両本対照の画像データベースをも併せ作成した。

9　貴重古医書のデータベース化及び医史学的、書誌学的な調査研究

室　　員　Wolfgang Michel（言語文化研究院教授）
担当部署　深川　光郎（医学分館図書館専門員）
職　　員　鳥居　　愛（医学分館閲覧係）
職　　員　有田　順一（文系合同図書室資料管理係）

〈研究開発の内容〉

数々の版本や写本の寄贈や移管により増えつつある古医書コレクションの未整理の資料を調査しながら、コレクションのウェブサイト（http://herakles.lib.kyushu-u.ac.jp/igaku/index.html）を根本から作り直し、古医書の解説・研究ノートを拡充したり、倭漢籍及び洋書の総目録の更新を行ったりした。また、ブログなどで内容的に高い評価を受けながら、より質の高い画像資料が望ましいという指摘を受け、「東西の古医書に見られる身体」の電子展示の図版を撮影し直し、サイトの改訂を開始した（http://www.lib.kyushu-u.ac.jp/igaku/exhibitions/1998/index.html）。

さらに、平成14年度研究成果公開促進費により作成された附属図書館医学分館「古医書画像データベース」（http://herakles.lib.kyushu-u.ac.jp/icomb/）の画像資料に付してあるキーワード（４ケ国語）を点検し、拡充した。